らない。故に如何なる遊戯が行はれたかといふことは言へるが、如何なる遊戯を行はしむべきかといふ遊戯題目を選定することは、とかく妥當を缺くやうになる。しかし遊戯の研究は常に而も大いに必要である。故に我が校では遊戯題材を決定してはない。

物に即し、場所に即し、場合に即して兒童が自發的創作的に遊戯することを大いに奬勵してゐるのである。故に教師は遊戯を教へるのではなく遊んで見せる。兒童の遊びに入つて共に遊ぶ。兒童と共に遊戯を考案し、工夫し活動するのである。そして教室には遊戯するに適する設備を出來るだけしておくのである。家庭でする遊戯は學校でもする。鄉土に行はれる傳統的な遊戯も學校に取り入れる。故に日々の學校生活は遊戯と作業が大體半々になつてゐるのである。

併し乍ら『お手紙ごつこ』とか『お客遊び』などは、遊戯の題材としても作業の題材としても價値のあるもので、それらは遊びが作業化されるものとして當校では作業題材に選定してゐるのである。

尋一「お月見」作業の指導

徳田　進

何故「お月見」を作業題材とするか

（一）尋一兒童精神作業の特色から

「お月見」本當に香氣の高い題材だ。仲秋十五夜のお月見は大人にとつても遊神の境地であるが彼等兒童にとつてはそれ以上に魅力ある世界なのだ。

尋一兒童はロマンチストである。お月樣を神祕化し、擬人化して、呼びかけ話しかけ歌ひかける。親しみを持ちこ

そすれ、自分と月との間に差別をつけない。實際主客未分の狀態にある。お月樣を仰ぐと、童話の詩趣がひし〳〵と彼等の胸中を占領する。

かういふ眞底からの興味や、月に働きかけようとする精神活動を催させる「お月見」を題材としてこそ、無理のない然かも教育効果の多い指導が出來るのである。

（二）行事の教育的價値から

現代の機械的スピード的な物質文明は、兒童を小利口な理窟家にこそすれ、高雅なおちつきある子供には、してくれない。兒童としての鷹揚な心の故鄉があるべきだ。情趣感興の世界が與へらるべきだ。此の點から觀て「お月見」といふ行事は、童心に微笑みかける尋一兒童の天上の遊步場である。

（三）題材が季節に即す必要から

尋一兒童に指導する事項は、季節々々に相應したものである事が望ましい。それは、見させ、聞かせ、試みさせる爲に材料が得易いばかりでなく、兒童は季節にあつた生活を、日常不知不識の間に營んで居るのだから、實生活と連絡をとつて、季節に即した日常生活を統整指導してやる事が大切なのである。

秋は月が美しい、特別に麗しい、そして十五夜といふのは、九月に限つて、彼等が家庭で經驗する事なのである。

この經驗を活用して學習させる事は、兒童生活の特相を觀破した賢明なやり方だ。

（四）教材の發展關係から

前記の通り、九月には、九月の題材がある。他の一例で言ふならば、秋の虫の如く。

所で、秋の虫を觀察させ、經驗を發表させ、其の泣き聲を調べさせて行くと、きつと秋の夜の話が出、お月樣が話題にのぼつて來る。

一題材秋の虫が他の題材お月樣を其の中に包藏してゐる時、之を捉へて作業資料とする事は、その學習內容を益〻前後脈絡を保つて發展させ、從つて精神筋肉兩作業を一層圓滑に發揮させてやる事になる。

それで、「お月見」といふ題材が、是非作業されねばならなくなつて來る。

（五）教材としての價値が多いから、

「お月見」と言つても、唯お月見の話をするのでは無く、下話の通り、月や星を、計劃的に作りもし、描きもし、月見の事を記述もすると言つた工合で、今迄算術國語圖畫手工といふ名で呼ばれてゐた學習事項は、一切渾然一體となつて、月見遂行の過程に兒童に提供される。分科意識の極めて少い尋一兒童には、この種の遊びの間に、勉學が行れる事が望ましいのである。

お月見作業の實際はどうか

今、實際を（一）經驗發表（二）作業事項の決定（三）着手と其の指導の項目の許に述べて見るが、勿論此の全過程を仕上げるのには、大略三日間の日時を要するのであつて、一日で成るものではない。

（一）經驗發表

教師「秋の虫の所で、近頃お月様のよく照つてゐる庭でこほろぎやくつわ虫が、澤山鳴いたと言ふお話が出ましたね。今日は九月十二日、お月様は一層まんまるになつて來ました。之であと二日經つて九月十五日の晩になると、本當のまん丸」玆迄話して來ると、「先生十五夜」の聲が起る。

教「さうです。十五夜と言ひますね。（十五ヤと板書）學校でも十五夜をお迎へしてお月見したいものですね」

（オ月ミと板書）兒童から拍手と歡聲が起る。

兒一「嬉しいな。先生、去年僕お家でやりましたよ」

兒二「私もよ」

兒三「僕は、お母様と梨や栗を買ひに行きました」

各自經驗を想ひ起して、お互に話し合ふのには夢中。

教「大概の方が知つてゐるやうですね。それでは、どの組でも話しつこ、聞きつこしませう。順番に右の端の人からよく話しませう。殘らず聞きませう」

六組に分れてゐる各組の兒童各自、自分の組の者に、去年の經驗を發表する。忘れた子は聞き手にしておく。教師は、お話下手の兒童の所に行つて、話の緒口を出してやつたり、聞き手になつてやつたりする。

教「皆さん樂しくやつたようですね。お月見やつた方は

手をあげてごらん。（しない家の子が約五分の一ばかりゐる）あゝ、しなかつたお家もありますね。宜しい、それでは今年は、其の分丈、學校で皆さんと一緒に致しませう。所で、此の人達にも、先生にも、皆さんのしたお月見の話を聞かせてくれるといゝのだが」

先生々々と擧手大勢。

教「關根君」と、指名。引續き、二三名。話者聽者にお話作業聽方作業の注意を時々與へる。

又、話の要點は板書（アカルイマルイ月、ツクエノウヘノオダンゴ、クリ、ナシ、リンゴ、ブドウ、ススキ等）

教「面白いお月見でしたね。こんどは、先生がお月見のお話致しませう」

兒童拍手緊張。教師は、お月見の由來、兎の餅つき、その童話、上げるものをわかり易く、所々、板書を加へて說話。

（二）作業事項の決定

教「學校でもお月見を是非致しませう。どのやうにしたら面白いでせうか。うまい事考へつこしませうよ」

各組毎に話し合つて相談。要點は、ノートに記入させておく。教師は、相談のはかどらぬ組を指導。

教「相談出來ましたか。內村さんの組は、どんな事がきまりましたね」と各組毎に次の點にふれた發表をさせて見る。ナニヲアゲルカ。ナニヲツクツテカザルカ。

教師は、其の發表內容を批判しつゝ、次の如く決定。

前記經驗者發表に出た上げる物。月と星の作製と級の裝飾

教「ではこれから、かういふ物を作つて、お月見しませう。自分は何を作りたいか考へて下さい」

作製物を、兒童の希望と、能力、個性を對照考慮して決定。次の如く組を編成。

月組——三人。月の作製。

星組——四人づつ三組、星の作製。

三寶組——三人づつ二組、一組が一個作製。

かさり組——殘全體、壁間等の裝飾物作製。

教「さあ、どの組も、作る物のオホキサヲドノクライニスルカ。ナニヲツカツテツクルカ。（板書）相談しておきめなさい」と、各組の相談質問に應じる。相談の結果を記

入發表させ次の注意を與へる。

月組――大コンパスの使用法。月の色は黄の色紙で。

星組――大小種々の星。金色の色紙貼付。

三寶――色紙はうす茶、寸法は模型の三寶の提示で。

月星兩組とも貼り場所は、前面の黒板使用。

（三）着手と其の指導

各組を絶えず巡視し或は仲間には入つて、仕事の遲い所粗雜、餘りの喧噪、物品の亂雜、製作方法の不明を指示。

出來上つたものは一應批評を下した後貼付させる。

教「いよ〳〵おだんご作りです。之から、粘土で作りませう」

板、粘土の配布、水、雜布の用意終了後製作指示。

前同樣の指導。出來た所はずん〳〵一つの三寶へ積重ねさせる。人數の關係により十五と數を限定しないで可。おだんごは、全兒童に作らせる事が、彼等を、お月見したと意識させる爲に大切である。

出來上つた子供達には、梨、栗の粘土細工指導。之は全體に望まなくとも可。他の三寶へ積む。

この後どう處置して行くか

（一）お祝の歌とおどり

一同清掃整頓された教室で、製作品鑑賞。

當日だと、家の許を得て、實際のおだんご、果物、すゝきを持つてる兒童も多いが、許容する。

教「さあ、之でいつお月樣や兎さん達が來ても、困りません。皆さん一緒にお月さまを歡迎しませう」

一同拍手喝采。靜まるのを待つて教授しておいた「十五夜お月さん」「出た〳〵月が」「ポツタン〳〵やれつけ、それつけ」等の唱歌と遊戯。全體で、時に數組で、時に一人で。

（二）お月見學藝會開催。

前々日から、學藝會を開くことを豫告しておき、實演種目を平素學習してゐる事や、課外の讀み物、見聞事項から選んでおくやうに注意を與へておく。

前日自分のすることを教師へ報告。教師は之に基いてプログラムを作り當日印刷したものを配布する。

之に從つてお祝の歌とおどりに引き續き進行。

（三）記述

學校のお月見、お家のお月見を、學藝會開催翌日記述させる。之には繪を入れさせるのが一層よい。

（四）手工

後日、畫用紙の後半の所に月と空を描かせて、折り立たせて、立體的にし、前半を緣側風にかゝせて、玆に紙製の机を立たせる、机には供へ物をかゝせておく。

（五）數量

「十五夜は、九月一日から幾日目の晩ですか」

「今年の十五夜は何曜日でしたか」

といつた問題を、毎日の兒童カレンダーを使用して調査させ、日數の計算、十五夜たる所以を、知識から明かにする。

（六）直觀

其の後怠らず月の形の變化、明るさの推移に注意させておき、一週間の終り毎に、發表させて見る。

この時教師から三ケ月、半月、滿月の簡單な說話をしてやる。

時の展覽會作業の指導

永堀千鶴子

(1) 作業の動機

六月のカレンダー製作の際に、六月十日は時の記念日と記入した。そして、時の記念日は、日本で初めて時計の出來た日であると云ふことを說話しておいた。

このよき機會をとらへて、一つの作業題材とすることは